

# 経済・金融 フラッシュ

## 貿易統計 13年1月 ～貿易赤字は当面拡大傾向が続く公算

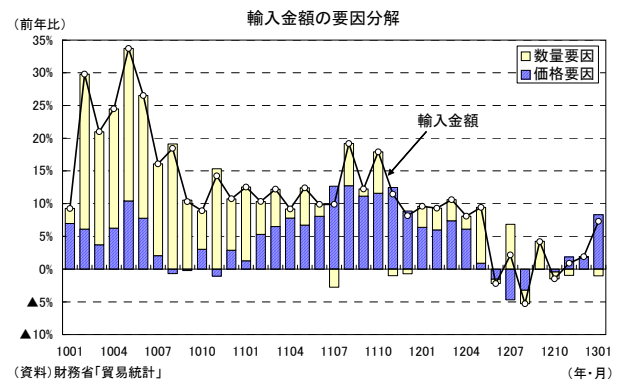
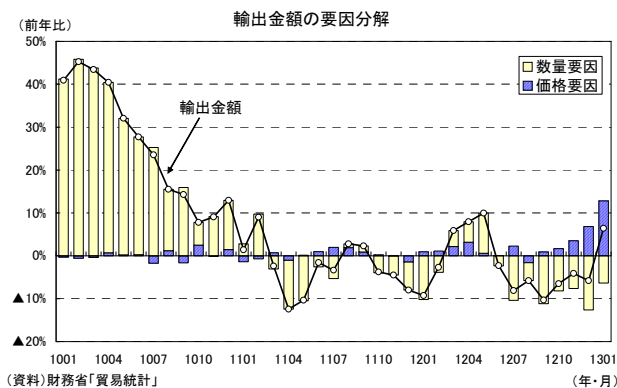
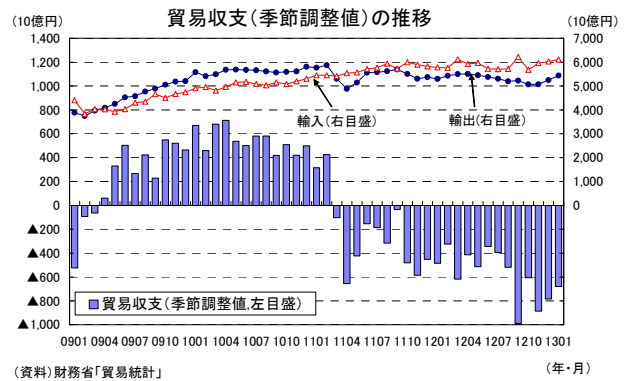
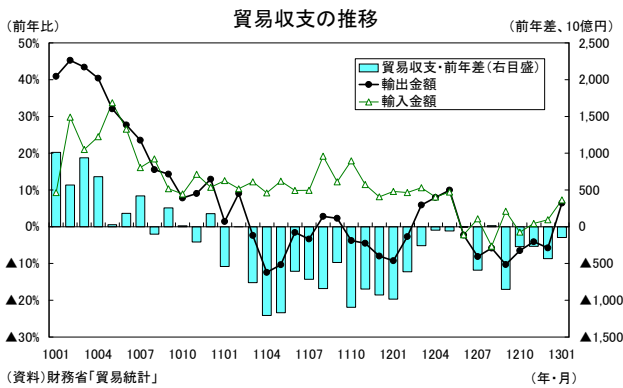
経済調査部門 経済調査室長 齋藤 太郎

TEL:03-3512-1836 E-mail: tsaito@nli-research.co.jp

### 1. 貿易赤字は原数値では過去最大に

財務省が2月20日に公表した貿易統計によると、13年1月の貿易収支は▲16,294億円と7ヵ月連続の赤字となり、赤字幅は事前の市場予想（QUICK 集計：▲13,722億円、当社予想は▲14,929億円）を大きく上回った。輸出が前年比6.4%（12月：同▲5.8%）と8ヵ月ぶりの増加となる一方、輸入が12月の前年比1.9%から同7.3%へと伸びを高めたため、前年に比した貿易収支の悪化幅は前月よりも拡大した。

原数値の赤字幅は過去最大となったが、1月はもともと正月休みの影響で輸出量が少なく貿易赤字になりやすいという季節性も影響している。季節調整済の貿易収支は▲6,789億円と23ヵ月連続の赤字となったが、12月の▲7,838億円から赤字幅が若干縮小した。輸出入ともに前月比で増加したが、輸出の伸び（前月比3.6%）が輸入の伸び（同1.4%）を上回ったことが赤字幅縮小に寄与した。



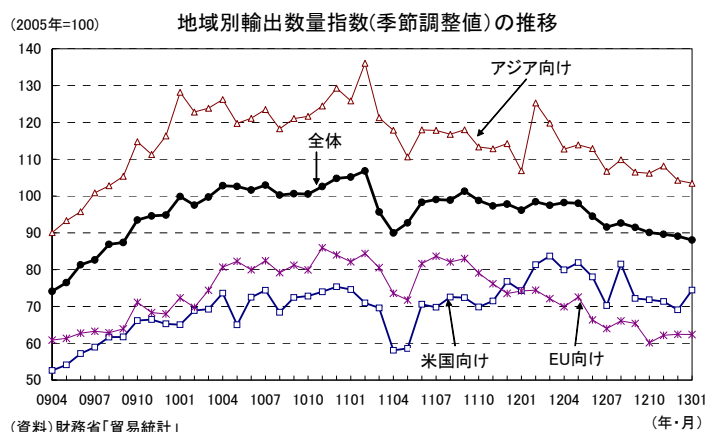
輸出の内訳を数量、価格に分けてみると、輸出数量が前年比▲6.0%（12月：同▲12.2%）、輸出価格が前年比13.1%（12月：同7.3%）であった。輸入の内訳は、輸入数量が前年比▲1.0%（12月：同0.0%）、輸入価格が前年比8.4%（12月：同1.9%）であった。

## 2. 当面貿易赤字の拡大傾向が続く公算

1月の輸出数量指数を地域別に見ると、米国向けが前年比0.7%（12月：同▲9.8%）、EU向けが前年比▲16.0%（12月：同▲15.6%）、アジア向けが前年比▲0.2%（12月：同▲8.2%）となった。

景気後退が続くEU向けが引き続き大幅な減少となる一方、米国向けが増加に転じ、アジア向けも減少幅が大きく縮小した。ただし、アジア向けについては中国の春節が今年は2月上旬（昨年1月）だったため、1月の中国向けの輸出が押し上げられている面があり、実勢はそれほど強くない。

季節調整値（当研究所による試算値）では、米国向けが前月比7.7%、EU向けが同▲0.1%、アジア向けが同▲0.7%、全体では同▲1.2%であった。



輸出は弱めの動きが続いているが、海外経済が中国を中心に持ち直しつつある中、大幅な円安が進行するなど輸出を取り巻く環境はここにきて改善しており、近いうちに下げ止まりから持ち直しに向かうだろう。

ただし、輸出の持ち直しが金額ベースの貿易収支の改善につながるまでには一定の時間がかかる可能性が高い。日本の貿易取引を通貨別に見ると、外貨建ての割合は輸出が61.6%、輸入が77.1%（米ドル建ては輸出が51.5%、輸入が72.5%、いずれも2012年下期実績）となっており、為替レートの直接的な影響は輸出価格よりも輸入価格のほうが大きくなる。このため、短期的には円安は貿易収支の悪化につながりやすくなる。

1月の貿易赤字は季節調整値では前月よりも縮小したが、輸出が春節の影響で押し上げられていることを考慮すれば、実態として赤字が縮小したとは言えない。2月以降は輸入価格の上昇が輸出価格の上昇を上回る交易条件悪化の影響を主因として貿易赤字（季節調整値）は再び拡大することが予想される。円安に伴う輸出数量の増加（輸入数量の減少）が金額ベースの貿易赤字の縮小をもたらすまでには半年程度の時間を要するだろう。

なお、本日の貿易統計の結果から1月の経常収支が原数値では3ヵ月連続の赤字となることがほぼ確実となった。現時点では季節調整値でも1000億円程度の低水準になると予想しており、12年9月以来4ヵ月ぶりの赤字となる可能性も否定できない。

（お願い）本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。